



右/作業所の職員の皆さんと。
左/金町浄水場の場内に設置された「コミュニケーション看板」(提供:佐藤工業(株))。



私の
仲間
komachi's
point

輝
け!

けんせつ小町

現場監督

田中絵里子

佐藤工業(株)
佐藤・カジマリノベイトJV
堀切橋その2工事作業所



「けんせつ小町」は、日建連が定めた建設業で活躍する女性の愛称です。

道路や橋、上下水道など高度経済成長期につくられ、日本を支えてきたインフラ。その多くが竣工から50年以上経過し、改修時期を迎えている。今回は、都内で橋の耐震補強工事に従事する土木分野の若き現場監督に、入職のきっかけや今後の夢を聞いた。

「道路工事の人になる!」 幼少期の夢が現実に

田中絵里子は一九九一(平成三)年、東京都生まれ。二十数年間を地元・小金井で過ごした。吉祥寺や立川、渋谷にも三〇分以内で行くことができ、公園や河原などの自然も多い街だ。

「小金井がすごく好きなんです。そのまま十分素敵な街なのに、再開発事業で街の様子が変わっていくのが悲しくて」

生まれ育った街の姿をできる限り守りたいという想いから、大学では都市工学を学び、公務員を目指した。しかし、市役所のインターンシップを経験し、新たな想いが芽生えた。

「契約などの発注業務を体験するうちに、私がやりたいのは守ることじゃなく、つくることだと気が付いたんです。机に向かうよりも現場に出た方が面白いって。それでゼネコンを選びました」

小金井の恵まれた自然の中で土遊びや川遊びに勤しんだ幼少期。保育園で道路に溜まった水を吐き出す水路をつくった時の楽しさが原点にある。

「これは母から聞いたんですが、その時に『道路工事の人になる!』って言い切っていたらしいです。もしかすると、生まれたときからこの道に進むことが決まっていたのかもしれませんがね(笑)」

まずは現場の雰囲気づくりから

入社して最初の現場は東京都葛飾区にある金町浄水場だった。浄水場内の連絡管を新設する工事だ。

「一、二年目はまだ役に立てない。でも現場の雰囲気づくりならできるとって思ったんです」

自らできることを探し実践する田中に、所長が、現場内にある掲示板に毎月季節ごとの花を撮影し、その写真に言葉を添えて掲示してくれないかと提案した。

「社章のモチーフになっている下り藤がちょうど場内に咲いていたので、最初にそれを撮影しました。自分への励ましの言葉を添えて」

田中は、仕事で落ち込んだときに、見たら元気になるようにと、自分へのエールを写真に添えた。感じたことを戒めや励ましとなる言葉に変えるのは簡単なことではなかったが、継続することに意味があると、生みの苦しみを感じながらも更新を続けた。

昨年九月いっぱいでの異動が決まり、以後、更新されなくなること聞いた作業員からこんな言葉を掛けられた。

「『ちゃんと読んでいるから、異動しても続けてよ』と言われて、嬉しかったですね。正直、やり始めた頃は気も筆も進まなかったの。異動後も年内まではと、三度更新を続けた。名前もなかった田中のこの取組みは、「コミニ





職長の鷹さんと工事の進捗を確認する。職人さんとも積極的にコミュニケーションをとるなど、現場の雰囲気づくりは欠かせない。

「汚れた作業着は頑張った証拠。 建設業界のイメージを変えるのが夢」

ニケーション看板」とネーミングされ、浄水場の場内でいまも作業員にエールを送り続けているという。

女性らしい繊細さと男勝りな負けん気

三年目の今も雰囲気づくりへの努力が続いている。言われたことをやっていた一年目と比べて自主的に行動するようになり、やりがいが大



私の現場
komachi's point

上/震災時の避難路や物資の輸送機能、復旧活動を支える道路機能の確保に向けて、橋梁の長寿命化と耐震補強を行っている。
下/掘切橋は荒川と綾瀬川を跨いでおり、濁水期にあたる11～5月までの7カ月間で両河川部の工事を進めなければならない。

きくなったという。仕事への姿勢は変わったのだろうか。

「一度見たら一度で覚える、自分の言葉に責任を持つ、そして明るくいること。この三つを心掛けています」

現場の指揮を執る大西所長は田中の印象をこう話す。

「建設業界はまだまだ男性の多い社会なので、そこに田中が入るとやっぱり明るくなりますよね。女性ならではの視点があって、現場の掃除の仕方にしても、細かいところによく気がついてくれます」

だが、よく気がつくが故に悔しい思いもする。

「たとえば作業通路にものが置いてあると、邪魔だし危険なので片付けようと思いますよね。でも重たいので途中で力尽きちゃうんです」
誰かに頼んで移動してもらえばよいことだが、そこは自分でやりたい性分。大西所長もそれを強く感じている。

「頼めば誰でもやってくれると思うんです。でも田中はなんでも自分でやりたい。それは私も止めずに進んで挑戦してほしいと思っています。それがどれだけ重いかをわかった上で出す指示と、重さも知らずに出す指示では相手の受け取り方が変わるはずですから」

今後主任になれば発注者やコンサルタントと交渉をする機会が増えてくる。コミュニケーション能力に更なる磨きをかけて、ゆくゆくは所長になってほしいと周囲は期待を寄せている。

建設業界のイメージを変えたい

周囲の期待を、田中はどう思っているのか。「所長になる具体的なイメージはまだできませんが、建設業界のイメージを変えたり、会社を有名にすることができたらいいなという夢は持っています」

実際、一般の人が現場の中を見る機会は少なく、どうしても外から見ただけのマイナスイメージを持ってしまふ。

「工事で近隣の方にご迷惑をお掛けすることもあるのですが、インフラ整備の根本には、皆

komachi MEMO

「作業員さんに『よく泣くから』といわれて、泣いている猿のマスコットをもらったり、同期から『一緒に現場を見て歩いてね』っていわれて犬のマスコットをもらったり…みんなからもらった物を持ち歩いていたら、マスコットもだんだん黒くなりました(笑)」



profile

たなか・えりこ◎1991(平成3)年、東京都生まれ。2014年4月佐藤工業(株)に入社。直後に金町浄水場送配水ポンプ所(仮称)場内連絡管新設工事に配属される。2015年10月より、現在の堀切橋耐震補強工事(橋脚補強)その2工事に従事。

「これまでは所長に言われたことをやるって感じでしたけど、段々と自分で何でもやらせてもらえるようになって、それがやりがいになっています」(田中)

さんの生活をより快適にするという目的があることを知っていただきたいんです。工事の意義をもっと発信して、一般の方に知ってもらえれば、建設業界のイメージは変わっていくと思います」

たとえば汚れた作業着を、一般の人は不快に思うかもしれない。しかし田中はこう捉える。「汚れている方がカッコいいんです。今日も

頑張った作業着を汚らなくていいです」

作業着の汚れは汚いのではなく、頑張った勋章だ。地中に埋まる水道管の工事はなおのこと大きな勲章を授かる。

「それに、水道管がどんな風に埋まっているのか、普通は知りませんよね。それが見られるって魅力的じゃないですか？ 他の人が見たことのないものが見られるのが、この仕事の一番の楽しみです」

そんな魅力に共感する女性を増やし、労働環境を整えようと建設業界も日々邁進している。事実、各社が持ち回りで幹事を務めるゼネコンに所属する女性技術者の集まりもあり、女性同士の悩みを共有する場も増えてきた。

「二人じゃないから入ってみてください。女性の入職は大歓迎ですし、女性のためにこうした方がいいのではないかと、いろいろと動いてくれる方が大勢いますよ」

さらさらとした笑顔で未来の後輩へエールを送りながら、建設業界への愛を語ってくれた。